# 社会技術研究開発事業
# 研究開発実施終了報告書

SDGs の達成に向けた共創的研究開発プログラム

シナリオ創出フェーズ

**「市民の SDGs 取組に向けた行動変容のための**
**ミュージアム活用シナリオの創出」**

研究開発期間　令和 4 年 10 月～令和 7 年 3 月

研究代表者氏名：佐々木　亨
（北海道大学大学院文学研究院 特任教授）

協働実施者氏名：佐久間　大輔
（大阪市立自然史博物館学芸課 課長）

目次

Ⅰ．本研究開発実施終了報告書サマリー ..... 3

Ⅱ．本編 ..... 4

１．研究開発プロジェクトの目標 ..... 4
１－１．研究開発プロジェクト全体の目標 ..... 4
１－２．プロジェクトの位置づけ ..... 6

２．研究開発の実施内容 ..... 7
２－１．実施項目およびその全体像 ..... 7
２－２．実施内容 ..... 11

３．研究開発成果 ..... 19
３－１．目標の達成状況 ..... 19
３－２．研究開発成果 ..... 19

４．研究開発の実施体制 ..... 23
４－１．研究開発実施体制 ..... 23
４－２．研究開発実施者 ..... 25
４－３．研究開発の協力者 ..... 25

５．研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など ..... 26
５－１．シンポジウム等 ..... 26
５－２．社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など ..... 27
５－３．論文発表 ..... 29
５－４．口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表） ..... 30
５－５．新聞報道・投稿、受賞など ..... 31
５－６．特許出願 ..... 31

６．その他（任意） ..... 31

# Ⅰ．本研究開発実施終了報告書サマリー

## 当初計画で掲げられた目標

シナリオ創出フェーズにおける本事業終了時には、プロジェクトの「最終アウトカム」である「より多くの市民が SDGs 課題解決に向けて、主体的に行動がとれるようになる」、およびその副次効果として「博物館の社会的資源の価値が高まり、より多くの市民が博物館を身近で、楽しく開放的な対話の場として利用するようになる」という状態が実現していることを目指してきた。

実施内容の大項目 4（大阪市立自然史博物館において実施したプログラムにおける外部便益測定）は着手できなかったが、複数タイプのプログラム実施とパッケージ化と、ヨコ展開先 1 館での試行ができた。また、上記の目標達成に向けて、ソリューション創出フェーズにおけるミュージアム・エデュケーター人材育成の準備と評価枠組みの設定ができた。

## 主な実施項目と内容、成果

1 年目のはじめに、プログラムの全体構想とともに、大阪市立自然史博物館のミッションとの関係性を確認した。その後、研究期間を延長し、2024 年 12 月まで大阪市立自然史博物館で可能性試験を実施しながら、プログラムを開発した。また、大阪市立自然史博物館以外のミュージアムとして、きしわだ自然資料館でも試行した。

これらの試行を通して、SDGs 人材育成（持続的に維持すべき価値を理解し、複雑な社会課題を読み取り、解決策を積極的に模索できる能力を持つ市民の育成）に向けた 2 つの流れを創出した。①ワークショップ参加前後の促しとケアでは、【ミュージアム来館前】には、図書館や地下鉄コンコースなどにおいて、これまでのワークショップで生まれた手書きの Q&A を展示して、ミュージアムに関心のない地域住民や市民を対象に SDGs への関心を高め、来館したい気持ちを促し、【ミュージアム来館時】には、ミュージアムでワークショップに参加し、主体的な学びと対話を経験し、【ミュージアム来館後】では、ワークショップ参加者に手渡すハンドアウトを使って、その後の関心がさらに深まり、広がるように促した。②ミュージアム以外の教育の場の活用では、図書館・公民館などの社会教育施設および学校教育の場を通じた SDGs 人材育成を目指すこととした。

一方で、ソリューション創出フェーズに向けたプログラムのパッケージ化において、重要な要素となるエデュケーター（ファシリテーター）人材育成に着目したツールが必要と判断し、ファシリテーション可視化のためのワークショップを実施し、その結果に基づいたファシリテーション動画「ミュージアムでのワークショップの作り方」を作成した。併せて、「ソリューション創出フェーズ」に向けたヨコ展開候補先へのプログラム説明も実施した。

# Ⅱ．本編

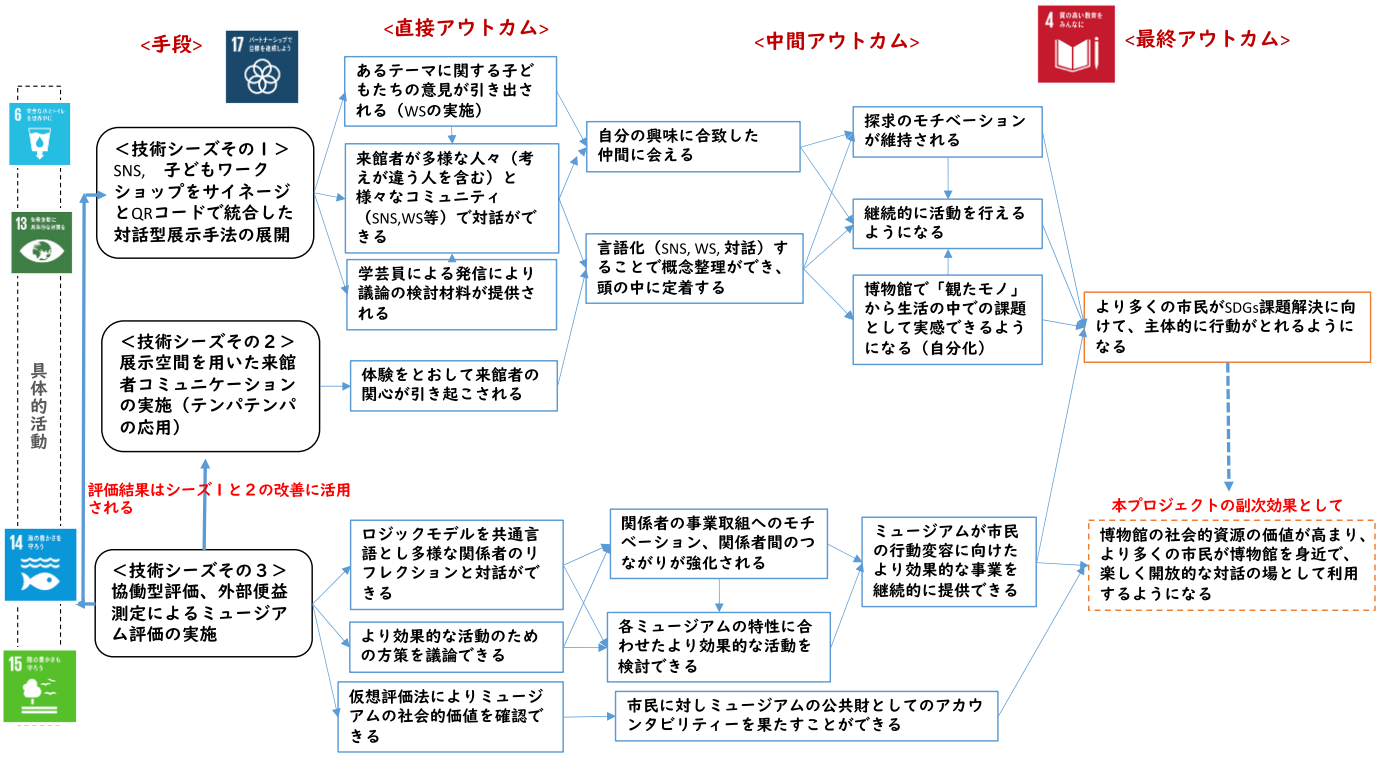
## １．研究開発プロジェクトの目標

### １－１．研究開発プロジェクト全体の目標

＜目標をどこまで達成できるか＞

シナリオ創出フェーズにおける本事業終了時には、以下の「セオリー・オブ・チェンジ」（TOC）の図の「最終アウトカム」である「より多くの市民が SDGs 課題解決に向けて、主体的に行動がとれるようになる」、およびその副次効果として「博物館の社会的資源の価値が高まり、より多くの市民が博物館を身近で、楽しく開放的な対話の場として利用するようになる」という状態が実現していることを目指す。

**市民のSDGs取組に向けた行動変容のためのミュージアム活用シナリオ（セオリー・オブ・チェンジ）**




大阪市立自然史博物館において実施する「技術シーズ 1,2」を活用したプログラムでは、重要な直接アウトカムとして「来館者が多様な人々（考えが違う人を含む）と様々なコミュニティ（SNS,WS 等）で対話ができる」状態が生まれ、さらに「言語化（SNS, WS, 対話）することで概念整理ができ、頭の中に定着する」から、「博物館で「観たモノ」から生活の中での課題として実感できるようになる（自分化）」という中間アウトカムが生成される。また「自分の興味に合致した仲間に会える」から、「探求のモチベーションが維持」され、

「継続的に活動を行えるようになる」という中間アウトカムが生まれる。これらの中間アウトカムは、最終アウトカムである「より多くの市民が SDGs 課題解決に向けて、主体的に行動がとれるようになる」につながっていく。なお、技術シーズ 3 から生まれる評価結果は、技術シーズ 1，2 を用いたプログラムの改善に活用される。

TOC の技術シーズ 1，2 を用いたプログラムは、協働実施者の佐久間が全体統括する「プログラム構想・開発・実施チーム」の大阪市立自然史博物館と大阪自然史センターが、3 名の研究協力者の協力を得て、初年度と 2 年度は大阪市立自然史博物館において、その来館者に対してプログラムを実施する。最終年度は、NPO 法人西日本自然史系博物館ネットワークに加盟するミュージアムの中から、伊丹市昆虫館・滋賀県立琵琶湖博物館において、それらの来館者に対してプログラムを実施する。

TOC の技術シーズ 3 は、協働型評価および外部便益測定によるミュージアム評価の実施であり、研究代表者の佐々木が全体統括する「評価チーム」のメンバーである源と林が担当する。大阪市立自然史博物館・伊丹市昆虫館・滋賀県立琵琶湖博物館においては、実施しているプログラムに対して協働型評価を行う。加えて、大阪市立自然史博物館では外部便益測定も行い、SDGs に向けた取組を実施することによるミュージアムの公共財としての価値を明確にする。

＜定量的な評価指標（KPI）＞

先の TOC に、想定される KPI の指標を入れたのが下の図である。

例えば、おもな指標として、中間アウトカム「言語化（SNS，WS，対話）することで概念整理ができ、頭の中に定着する」に対しては、

・ 指定したハッシュタグの合計リアクション数（反応した人の数）
・ WS やオンラインシンポジウム、掲示板などで交わされたり書き込まれたりして単語数／書き込んだ人の数

同じく、中間アウトカム「博物館で「観たモノ」から生活の中での課題として実感できるようになる（自分化）」に対しては、

・ ミュージアムで言語化した事象が、日常生活や実社会で自分化したと感じている来館者の割合

などが考えられる。

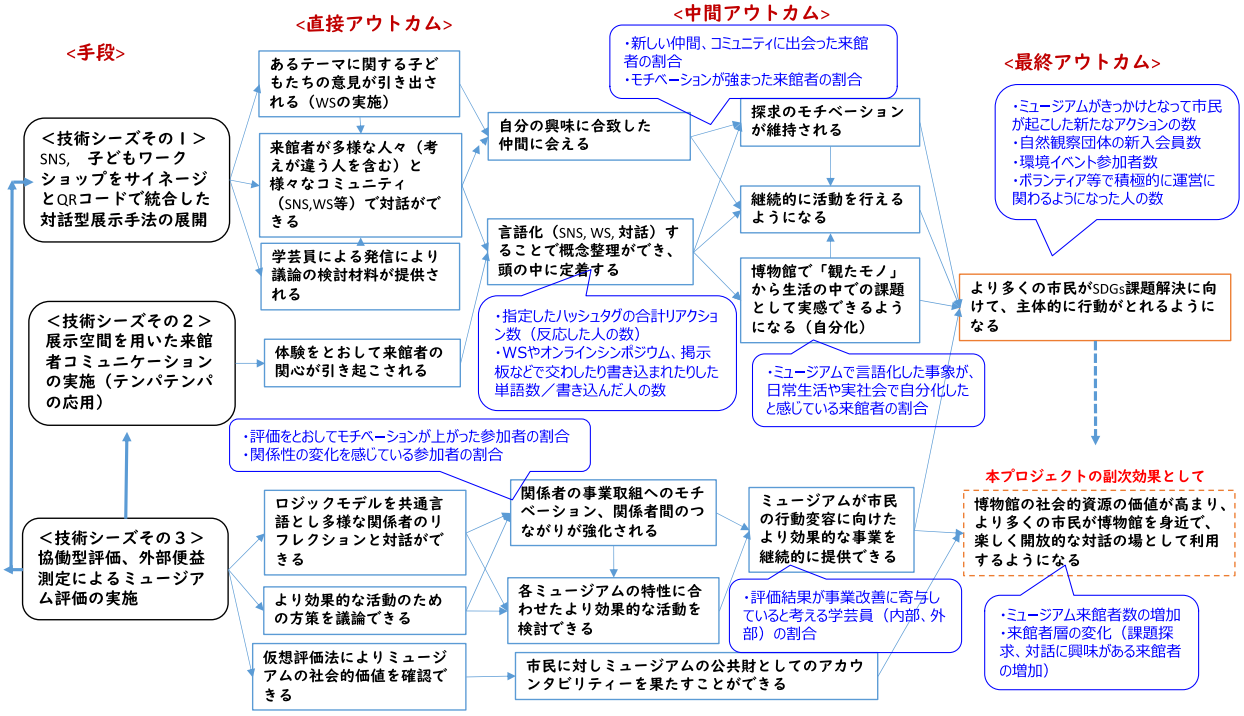
一方、最終アウトカム「より多くの市民が SDGs 課題解決に向けて、主体的に行動がとれるようになる」に対しては、

・ ミュージアムがきっかけとなって市民が起こした新たなアクションの数

・ 自然観察団体の新入会員数
・ 環境イベント参加者数
・ ボランティア等で積極的に運営に関わるようになった人の数

などが考えられる。

**KPIの指標（仮）（青字：ただし指標は関係者との評価ワークショップにおいて検討・決定する）**




## １－２．プロジェクトの位置づけ

シナリオフェーズを実施した大阪地域は、2025 年大阪・関西万博開催を目前に控え、SDGs という用語そのものは浸透を見せている。しかし、それは「我がこと」として取り組む課題というよりは、博覧会の展示会場でどのような「解答」が示されるのか、それを待っていると言った雰囲気になっている。さらに、万博会場そのもので「生物多様性との共存」が実現できないなど、多面的な追求を掲げるはずの SDGs への欺瞞感が増してしまっている。

このプロジェクトは当初から掲げるように誰かの解決策を提供して実施するのではなく、「探究のモチベーションを維持」し、「生活の中で実感できるよう自分化」をうながすことで、「主体的な行動を促す」ことを目的としている。上記のように社会の中で SDGs への欺瞞感が増してしまっているいまだからこそ、自ら考える動機を強めるこのプロジェクトは重要性を増している。

このプロジェクト実施期間に大きく変化したことは SNS 空間での言説である。Twitter 社の方針変更は、SNS 言論に不安感を大きくもたらしてしまった。管理基準がほとんどなくなり、博物館の関連 SNS にも不穏当な発言者が現れる状況を産んでいる。当初、子どもを含む参加者に SNS 空間での自由な意見交換を想定していたが、残念ながら未成年の利用にはよ

り慎重にならざるを得ない状況が生まれている。アメリカの大統領選に極端に表出するエコーチャンバー的な他者意見排除の様相が強い現下の SNS の状況はこのプロジェクトの実施になじまず、手書きの質問と手書きの回答という「オールドスタイル」な対話を用いたが、かえって閲覧者の強い注目をいただく形になった。SNS やサイネージではなくオールドメディアとしたことで博物館外への広がりを難しくしている部分があるが、図書館での展示などにより新たな展開も見えてきている。

## ２．研究開発の実施内容

### ２－１．実施項目およびその全体像

**大項目１：プログラム構想**

**中項目１：全体構想・可能性試験計画**

開発する４つのプログラム（「探究展示」、「インタラクティブサイネージ」、「子どもワークショップ」、「オンラインプログラム」）に関して、「プログラムの構想・開発・実施チーム」として、展示室での議論にふさわしく、興味を促進する「テーマ」は何か、具体的にどのようなコンテンツが提供可能なのか。話題のしやすさ、過激な議論に流れる危険性なども考慮の上、コンテンツ相互の関連性、ミュージアムの持つ資源との関連、全体ストーリーを検討し、2 年度における可能性試験の計画を完成させる。計画の立案には試行的な実施や試作も含む。

- 期間：令和 4 年 10 月～令和 5 年 3 月
- 実施者：協働実施者の佐久間と所属する大阪市立自然史博物館のスタッフ、協力組織として認定 NPO 法人大阪自然史センターのスタッフ、および 3 名の研究協力者（3.研究開発の組織体制の表参照）
- 対象：プログラムの試行においては、大阪市立自然史博物館の来館者

**大項目２：プログラム開発・実施**

**中項目１：大阪市立自然史博物館で可能性試験実施しながら開発。大阪市立自然史博物館で継続実施**

初年度に検討した可能性試験の計画に基づいて、4 月から 3 月までの 1 年間で、4 つのプログラムにおいて、概ね 3 ヶ月ごとに異なる内容で 4 回入れ替えて可能性試験を実施する。その際、戦術を評価した初年度の研究協力者 3 名が、プログラムの改善のための評価を実施する。

さらに、最終年度においても、大阪市立自然史博物館でプログラムを継続して、実施する。

- 期間：令和 5 年 10 月～令和 6 年 6 月

- 実施者：プログラムを実施するメンバーは、大阪市立自然史博物館・大阪自然史センターのスタッフ。および研究協力者 3 名が、プログラムの改善のための評価を実施（3.研究開発の組織体制の表参照）
- 対象：大阪市立自然史博物館の来館者

**中項目 2：伊丹市昆虫館、滋賀県立琵琶湖博物館でプログラム実施**

これまでプログラムを実施してきた大阪市立自然史博物館以外の 2 ミュージアム（NPO 法人西日本自然史系博物館ネットワークに加盟するミュージアム：伊丹市昆虫館・滋賀県立琵琶湖博物館）でも、個別プログラムのいくつかを試行する。

- 期間：令和 6 年 4 月～令和 6 年 6 月
- 実施者：大阪自然史センターのスタッフ（3.研究開発の組織体制の表参照）
- 対象：プログラムを実施するミュージアムの来館者

**＜中項目 3～7 は、大項目 2 の関する新規の中項目＞**

**中項目 3：ファシリテーション可視化のためのワークショップ開催**

大阪市立自然史博物館で実施しているプログラムをヨコ展開する際、そのミュージアムでファシリテータが必要となる。そのため、ファシリテータ育成教材を作成することとなり、ファシリテーション可視化のためのワークショップを大阪市立自然史博物館で開催した。

- 期間：令和 5 年 11 月 13 日
- 実施者：このプロジェクトの評価チーム
- 対象：このプロジェクトのプログラム構想・開発・実施チーム

**中項目 4：「ソリューション創出フェーズ」に向けたヨコ展開候補先へのプログラム説明**

「ソリューション創出フェーズ」に向けて、北海道内のヨコ展開候補ミュージアム 6 館を訪問し、学芸員やスタッフにプロジェクトの趣旨、プログラムの内容と係わり方などについて説明した。

- 期間：令和 6 年 2 月 27 日～3 月 3 日
- 実施者：研究代表者、認定 NPO 法人大阪自然史センターのスタッフ
- 対象：市立小樽文学館、小樽市立総合博物館、北海道開拓の村、小樽芸術村、国立アイヌ民族博物館、浦幌町立博物館

**中項目 5：ファシリテーション可視化のための動画撮影・編集**

中項目 3 のワークショップにおいて可視化されたファシリテーションの要素に基づき、ファシリテータ育成のための動画を撮影、編集した。

- 期間：令和 6 年 3 月 29 日～31 日

- 実施者：古屋和臣（映像・写真撮影/ディレクター）
- 対象：このプロジェクトのプログラム構想・開発・実施チーム

**中項目 6：図書館におけるサイネージを活用したプログラム広報とフックの提供**

ミュージアム来館前に、SNS やサイネージ（図書館や地下鉄コンコース）などを通して、SDGs への関心を高め、来館してプログラムに参加したい気持ちを促すフックを提供する。

- 期間：令和 7 年 1 月（予定）
- 実施者：このプロジェクトのプログラム構想・開発・実施チーム
- 対象：ミュージアムや SDGs に関心のない地域住民や市民

**中項目 7：プログラム終了後のハンドアウトの提供**

中項目 6 がミュージアム来館前の仕掛けであり、この中項目 7 はミュージアム来館後（ワークショップ参加後）の仕掛けと位置づける。ワークショップ終了時に参加者にワークシートを渡し、その後の関心がさらに深まり、広がるように促す。

- 期間：令和 6 年 12 月 14，15，21，22 日
- 実施者：このプロジェクトのプログラム構想・開発・実施チーム
- 大阪市立自然史博物館でのワークショップ（屋台形式）参加者

**大項目 3：協働型プログラム評価**

**中項目 1：大阪市立自然史博物館での可能性試験に対する評価。伊丹市昆虫館・滋賀県立琵琶湖博物館での実施に対する評価**

4 つのプログラム全体のロジックモデルを協働型評価により作成し、セオリー評価（戦略の評価）を行う。さらに、プロセス評価も実施し、多面的に協働型評価を実施することで、プログラム開発と実施に係わるメンバーとの対話を図りながら、シナリオの改善を進める。

大阪市立自然史博物館以外の 2 ミュージアム（伊丹市昆虫館・滋賀県立琵琶湖博物館）でも、個別プログラムのいくつかを試行する。

- 期間：令和 5 年 4 月～令和 6 年 6 月
- 実施者：研究代表者である佐々木亨と研究協力者である源由理子（3.研究開発の組織体制の表参照）
- 対象：大阪市立自然史博物館、伊丹市昆虫館、滋賀県立琵琶湖博物館において実施したプログラム。

**中項目 2：シナリオ作成に向けたプログラム汎用性の改善**

伊丹市昆虫館、滋賀県立琵琶湖博物館におけるプログラム実施により、シナリオ改善のための情報を得て、プログラムの汎用性を高める。なお、大阪市立自然史博物館を含む、プログラムを実施する 3 館は、リピーターがミュージアム運営に参画する制度や実績を有して

いるミュージアムである。ソリューション創出フェーズに向けた準備を進める際には、その仕組みを他のミュージアムでも取り込めるように留意する。

- 期間：令和 6 年 7 月～令和 6 年 9 月
- 実施者：評価チームを中心に、これまでプログラムを実施してきた大阪市立自然史博物館のスタッフ、協力組織として認定 NPO 法人大阪自然史センターのスタッフ、および 3 名の研究協力者（3. 研究開発の組織体制の表参照）
- 対象：作成するシナリオ

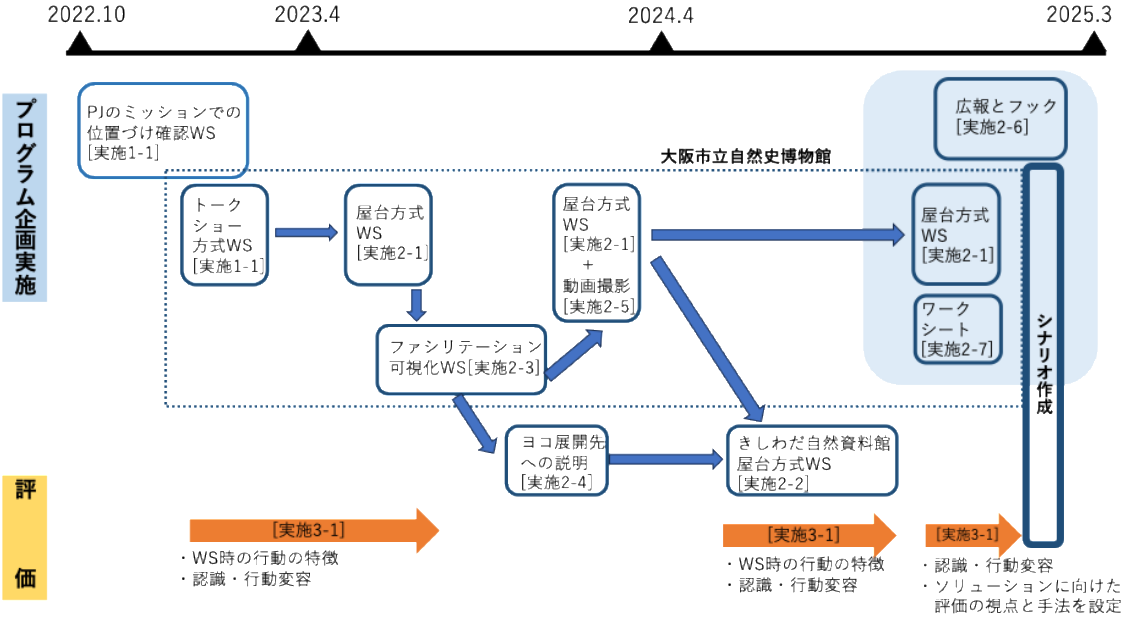
**大項目 4：外部便益調査**

**中項目 1：大阪市立自然史博物館において実施したプログラムにおける外部便益を測定**

2 年度目および最終年度に大阪市立自然史博物館で継続している SDGs の取組を体験した同館利用者にとっての便益（価値）を明らかにする。そのことで、SDGs に向けた取組が市場で処理されない価値として存在することが明らかになり、ミュージアムの公共財としての価値を明確にする。

- 期間：令和 6 年 4 月～令和 6 年 6 月
- 実施者：研究協力者である林勇貴（3. 研究開発の組織体制の表参照）
- 対象：大阪市立自然史博物館の来館者のうち、本プログラムを体験した方、および体験していない方

**研究期間中のスケジュールとフロー**



## ２－２．実施内容

### 大項目 1：プログラム構想

#### 中項目 1：全体構想・可能性試験計画

(1)　実施した内容・方法・活動

- （内容・方法・活動 1）プロジェクトの全体構想と大阪市立自然史博物館のミッションとの関係性を可視化した。
- 大阪市立自然史博物館のスタッフなどに対して、採択された本プロジェクトの内容を説明し、同館の活動のロジックモデル構築のためのワークショップを 3 回（R4.10.19, 12.21, R5.1.26）実施した。評価チームで伴走しながら、本プロジェクトの位置づけを明らかにした。
- （内容・方法・活動 2）可能性試験（プログラム）に関する計画を立案し、実施した。
- 同博物館の学芸員の専門分野を勘案し、かつ常設展示を活用して SDGs をテーマに展開できるコンテンツ候補は 8 つとなった（外来生物、台場クヌギ、ハチ、マイクロプラスチックとクジラ、ナウマン象、シカ、いなくなった生物、大阪湾の魚介類）。今回の試行では、プログラム構想・開発・実施チームの石田学芸員の研究テーマである「大阪湾の魚介類」をプログラムのコンテンツとした。その上で、このテーマはすでに展示しているコーナーがあるため、プログラムの形式としては、その展示の前で石田学芸員とファシリテータが掛け合いでトークショー形式のワークショップとして、実施した（R5.3.11-12）。

(2)　結果

- （1 の結果）大阪市立自然史博物館の事業に関するロジックモデルを完成させ、結果として本プロジェクトの遂行は同館のミッションを実現するための事業となることを確認した。併せて、本プロジェクトのセオリー・オブ・チェンジ（ToC）と評価指標を作成した。
- （2 の結果）R5.3.11 と 12 でそれぞれ 3 回、トークショー形式のワークショップを実施した。当日の来館者にアナウンスし、1 回 30 分で決められた時刻から開始し、合計で 65 家族が参加した。

### 大項目 2：プログラム開発・実施

#### 中項目 1：大阪市立自然史博物館で可能性試験実施しながら開発。大阪市立自然史博物館で継続実施

(1)　実施した内容・方法・活動

- （内容・方法・活動 1）令和 5 年 4 月から 3 月までの 1 年間で、概ね 3 が月ごとにプログラムを実施する予定であったが、ソリューション創出フェーズに向けたプログラムのパッケージ化において、重要な要素となる人材（ファシリテーター）育成に着目したツールが必要と、7 月のプログラム終了後に判断した。そのため、ワークショップと映像撮影を実施した。その結果として、R4 年度に試行した「大阪湾の魚介類」をテーマに、ワークショップの開催方法を変えて 2 回実施（R5.7.8-9, R6.3.30-31）した。
- 具体的には、特設の簡易展示スペース（屋台展示）を使い、ワークショップの開始時刻を決めず、だれでも自由に参加できるようにした。博物館学芸員の松井彰子と自然史センターの山中亜希子、神山雄人が担当した。
- （内容・方法・活動 2）令和 6 年 12 月に、大阪市立自然史博物館の自主事業として同様のテーマによるワークショップを、これまで試みていない開催方法で 4 日間、1 日 3 回（R6.12.14,15,21,22）開催した。
- 屋台方式であることは令和 5 年度と同様であるが、参加数する子どもの定員を 10 名として、約 40 分間のワークショップ＋その後の自由時間 15 分程度を 1 セットとして実施した。

(2)　結果

- （1 の結果）2 回実施（R5.7.8-9, R6.3.30-31）で、2 日間ずつワークショップを開催した。
- （2 の結果）12 回のワークショップで、合計 232 名（参加者（子ども）118 名、保護者 114 名）が参加した。

写真：屋台方式（簡易展示）でのワークショップ

**中項目 2：伊丹市昆虫館、滋賀県立琵琶湖博物館でプログラム実施**

**→<u>きしわだ自然資料館に変更</u>**

**(1)　実施した内容・方法・活動**

- 当初、NPO 法人西日本自然史系博物館ネットワークに加盟する 2 つのミュージアム（伊丹市昆虫館・滋賀県立琵琶湖博物館）でヨコ展開の試行をする予定であったが、どちらの館も担当窓口となる学芸員の都合がつかなかった。そのため、最終的に同ネットワーク加盟館である「きしわだ自然資料館」において、大阪市立自然史博物館で令和 5 年 7 月に開催した「屋台形式」を基本として、その上で同資料館に独自のコンテンツや人材を活用して、ワークショップを実施した（R6.9.28-29）。
- ワークショップの開始時刻を決めず、だれでも自由に参加できるようにした。
- 大阪市立自然史博物館において屋台方式で開催するときは、同館の学芸員と大阪自然史センターのファシリテータがチームを組んで企画・立案するが、きしわだ自然資料館では、大阪市立自然史博物館友の会会長の鍋島靖信氏（大阪府立環境農林水産総合研究所（旧・水産試験場）水産技術センター元主任研究員）が学芸員役を担い、大阪自然史センターのファシリテータが加わって開催した。
- きしわだ自然資料館の有力コンテンツである「チリメンモンスター」を探すコーナーを会場に配し、同館の標本も展示した。
- 併せて、1 日目の午前中は発達障害の子どもの参加を促すため、専門のスタッフを配して、体制を整えた。

**(2)　結果**

- 2 日間ワークショップを開催した。

写真：「チリメンモンスター」学習帳より（きしわだ自然資料館）

チリメンモンスターをさがしてみましょう！

1. ジャコをさがそう

チリメンモンスターがよくみつかるチリメンジャコを、さがしてみましょう。産地やとれた時期がわかるものがみつかると、あとで名前を調べたり、まとめたりするときに便利です。チリメンジャコ漁が行われている漁港が身近にあればその直売所で、なければ、乾物の問屋さんや地元の魚屋さんなどで、さがしてみてください。スーパーで売っているものは、あまりまじりものがないといわれていますが、よくさがすと、みつかることがあります。

2. ひろげよう

買ってきたチリメンジャコをひとつまみお皿にとりだして、ひろげてください。一度にたくさんとりだすと、小さないきものが、チリメンジャコにかくれてみつけにくいので、少しずつとりだしましょう。

3. チリモンをさがそう

つぎに、チリモンジャコ（カタクチイワシのこども）とかたちや色がちがういきものをさがして、ピンセットで、小さなお皿など、別の場所にとりわけてください。これが、チリモンモンスターたちです。

4. チリモンをわけよう

みつかったチリメンモンスターを、わけてみましょう。はじめは、魚のなかまとそれ以外でわけてみます。少しわかってきたら、魚のなかでも、かたちのにているものどうし、わけてみましょう。

5. かんさつしよう

わけたチリメンモンスターを、むしめがねや双眼実体顕微鏡で、よく観察してください。観察したら、うら面のチリモン図鑑で、にたいきものをさがしてみましょう。このとき、名前も調べてみましょう。スケッチをすると、よりわかりやすくなります。

6. はりつけよう

みつけたチリメンモンスターを、チリモンカードなどの台紙に、木工用接着剤ではりつけてみましょう。台紙以外に、寒天封入や、瓶に入れる、などの方法もありますが、チリメンモンスターが壊れないように保存できる方法がよいでしょう。台紙は、きちんとかわかしてから、ビニール袋などに入れておきましょう。

みつけたチリモンをまとめてみよう！

みつかったチリモンを表にしてみよう

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | | 11 | |
| 2 | | 12 | |
| 3 | | 13 | |
| 4 | | 14 | |
| 5 | | 15 | |
| 6 | | 16 | |
| 7 | | 17 | |
| 8 | | 18 | |
| 9 | | 19 | |
| 10 | | 20 | |

つぎのステップにすすもう

チリメンモンスターをさがして、とても楽しかったら、つぎのステップにすすみましょう。たとえば、こんな疑問がうまれたら……

○こんな小さなチリメンジャコ、どうやってとっているのかな？
○季節や場所がちがうと、みられるチリモンはかわるのかな？
○チリメンモンスターって、大きくなったら、どんないきものになるのかな？

これらの疑問を、本や水族館・博物館などに行って、しらべてみましょう。

身近な海にいきものの観察に行ってもよいかもしれませんね。チリメンモンスターは１度やっておわり、ではもったいないです。

ぜひ、つぎのステップにすすんでみてくださいね。

気に入ったチリモンをスケッチしましょう。

チリメンモンスターに関するいろいろな本。

磯のタイドプールには、小さないきものもいっぱい。

＜中項目 3～7 は、大項目 2 の関する新規の中項目＞

これら新規で追加した中項目は、いずれもサイトビジットおよび合宿において、マネジメントチームとの協議やソリューションフェーズ創出フェーズ PJ のメンバーとの意見交換から得た知見や気づきである。本プロジェクトが次のフェーズに進むための土台作りや、SDGs 人材の育成に向けたさらなる仕掛け作りとなっている。

中項目 3：ファシリテーション可視化のためのワークショップ開催

(1)　実施した内容・方法・活動

- ソリューション創出フェーズに向けたプログラムのパッケージ化において、重要な要素となる人材（ファシリテーター）育成に着目したツールが必要と、7月のプログラム終了後に判断した。そのため、7月に実施した「屋台方式」プログラムのファシリテーターの行動・声掛けなどの意味づけや関係性を可視化するためのワークショップ実施した（R5.11.13）。
- このワークショップのファシリテータは評価チームが務め、来館者を対象とするこれまでのワークショップを実施してきた学芸員とファシリテータなどが参加した。

- 来館者を対象とするファシリテーション・スキルを、ヨコ展開先のミュージアム担当者に伝えるため、ワークショップ実施時の映像を撮影し、動画を編集することとした。

(2)　結果

- ファシリテーション・スキルの全体像と各スキルの要素間の関係性が明らかになった。

**中項目 4：「ソリューション創出フェーズ」に向けたヨコ展開候補先へのプログラム説明**

(1)　実施した内容・方法・活動

- 「ソリューション創出フェーズ」に向けて、北海道内のヨコ展開先候補ミュージアム 6 館（市立小樽文学館、小樽市立総合博物館、北海道開拓の村、小樽芸術村、国立アイヌ民族博物館、浦幌町立博物館）を、研究代表者、認定 NPO 法人大阪自然史センターのスタッフで訪問し、学芸員やスタッフにプロジェクトの趣旨、プログラムの内容と係わり方などについて説明した（R6.2.27-3.3）。

(2)　結果

- プロジェクトの趣旨やプログラムの内容などを説明し、どの館においてもおおむね理解と共感を得た。
- とりわけ、きしわだ自然資料館での実施時と同様に、その館独自のコンテンツや人の係わりからの提案があった。
- 一方で、自分の博物館において、SDGs に関するプログラムを実施する意義や位置づけに戸惑う館もあった。

**中項目 5：ファシリテーション可視化のための動画撮影・編集**

(1)　実施した内容・方法・活動

- 中項目 3 のワークショップにおいて可視化されたファシリテーションの要素に基づき、映像・写真撮影/ディレクターの古屋和臣氏に、ファシリテータ育成のための動画を撮影、編集を委託した。
- それに先立ち、中項目 3 の成果を共有する打ち合わせを 2 回行った。

(2)　結果

- 動画「ミュージアムでのワークショップの作り方」本編（35 分）、プロモーション版（5 分）を作成した。

**中項目 6：図書館などにおけるプログラム広報とフックの提供**

(1)　実施した内容・方法・活動

- ミュージアム来館前に、図書館や地下鉄コンコースなどにおいて、これまでのワークショップで生まれた手書きの Q&A を展示して、SDGs への関心を高め、来館して

プログラムに参加したい気持ちを促すフックを提供する。そのために、令和 7 年 1 月 16 日～3 月 5 日に大阪市立中央図書館、令和 7 年 3 月 18 日～4 月 16 日に大阪市立港図書館において、これまでのワークショップのコンテンツや成果物を紹介するコーナーを展開した。

(2)　結果

・　大阪市立の 2 つの図書館で通算約 3 ヶ月間、展示を展開した。図書館の取り決めにより、正確な調査は実施できなかったが、プロジェクトメンバーが観察した範囲では、子どもだけでなくご両親などの大人も一緒に、関連する図書を読みながら、展示物やパネルを熱心に眺めていた。

**写真：大阪市立港図書館における展示**

中項目 7：プログラム終了後のワークシートの提供

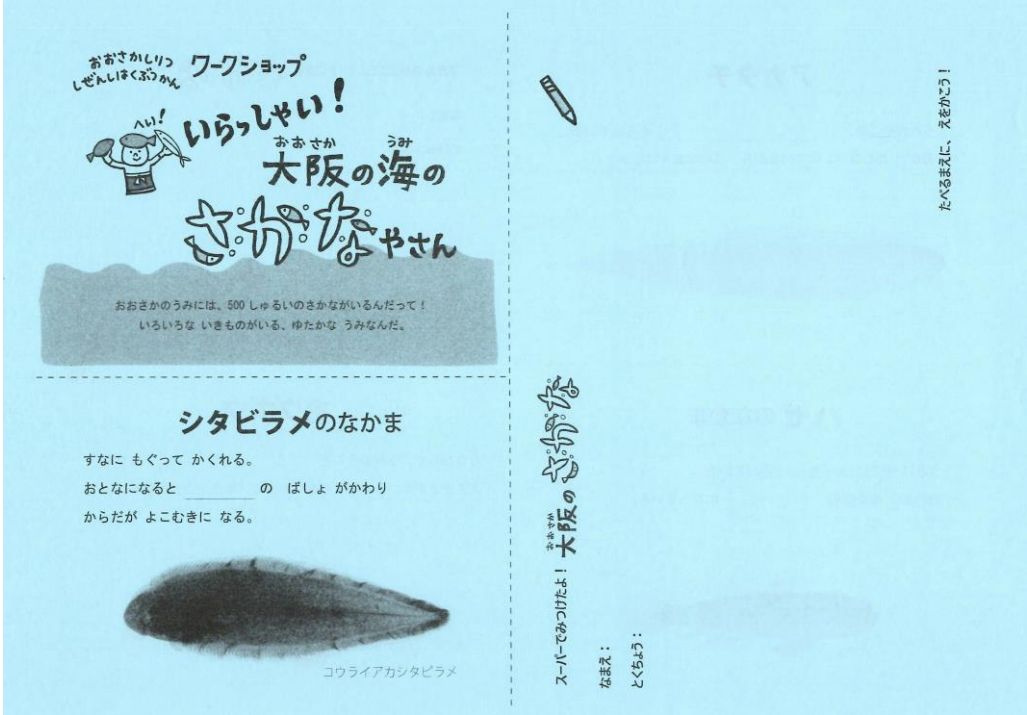
(1)　実施した内容・方法・活動

・　ミュージアム来館後（ワークショップ参加後）の仕掛けとして、ワークショップ終了時に参加者に「ワークシート」を渡し、その後の関心がさらに深まり、広がるように促す（令和 6 年 12 月 14，15，21，22 日）。

(2)　結果

・　4 日間のワークショップ（1 日 3 回開催）で 118 名の参加者に配付した。

写真：ワークシート



**大項目 3：協働型プログラム評価**

**中項目 1：大阪市立自然史博物館での可能性試験に対する評価。伊丹市昆虫館・滋賀県立琵琶湖博物館→きしわだ自然資料館（変更後）での実施に対する評価**

**(1)　実施した内容・方法・活動**

- 大阪市立自然史博物館：トークショー方式のワークショップ（2023.3）、屋台方式のワークショップ（2023.7）において、参加者の行動の特徴を映像により分析し、併せてワークショップへの参加による SDGs やミュージアムに関する認識や行動の変容をアンケート調査した。2024.12 の屋台方式のワークショップでは、SDGs やミュージアムに関する認識や行動の変容をアンケート調査した。それとともに、ソリューション創出フェーズに向けた評価の視点と手法を設定した。
- きしわだ自然資料館：屋台方式のワークショップ（2024.9）において、参加者の行動の特徴をトラッキングし、併せてワークショップへの参加による SDGs やミュージアムに関する認識や行動の変容をアンケート調査した。
- ただし、大阪市立自然史博物館、きしわだ自然資料館のどちらにおいても、厳密な意味での協働型の評価を実施するまでには至らなかった。その原因としては、プログラムの試行に向けた準備に時間がかかり、実施チームと評価チームとの密な打ち合わせが設定できなかったためである。

**(2)　結果**

- 研究期間中に実施したワークショップの参加者への調査結果などを検討し、評価の視点と手法を設定した。

**中項目 2：シナリオ作成に向けたプログラム汎用性の改善**

**(1)　実施した内容・方法・活動**

- 大項目 2-中項目 2 に記したきしわだ自然資料館でのプログラム実施、およびそれまでの 2 年間の大阪市立自然史博物館における実施方法の異なるプログラム実施により、プログラムの「パッケージ化」を進めた。

**(2)　結果**

- プログラムの「パッケージ」のうち、1）実施する SDGs のテーマは同じでも、ミュージアムごとにワークショップの内容を検討した結果でコンテンツに生じる差異、2）プログラムに係わる人材（館内の学芸員・教育普及スタッフ・事務系スタッフ、ボランティア・市民グループ、および新規育成など）の組み合わせも「可変ユニット」の内容となることがわかった。

・　「汎用ユニット」としては、常設展示、屋台、クイズ、Q&A、ワークシートなどがある。

**大項目 4：外部便益調査**

**中項目 1：大阪市立自然史博物館において実施したプログラムにおける外部便益を測定**
**→取り止め**

**(1)　実施した内容・方法・活動**

・　当初、2 年度目および最終年度に大阪市立自然史博物館で継続している SDGs の取組を体験した同館利用者にとっての便益（価値）を、林勇貴先生（大分大学）が仮想評価法を用いて測定する予定であった。明らかにする。

・　しかし、林先生の長期にわたる体調不良のため、調査に着手することができなかった。なお、ほかの研究者にこの測定をお願いしたが、文化施設における調査を実施できる研究者はいなかった。そのため、大項目 4 は実施できなかった。

**(2)　結果**

・実施しなかったため、結果が出ていない。

## ３．研究開発成果

### ３－１．目標の達成状況

シナリオ創出フェーズにおける本事業終了時には、プロジェクトの「最終アウトカム」である「より多くの市民が SDGs 課題解決に向けて、主体的に行動がとれるようになる」、およびその副次効果として「博物館の社会的資源の価値が高まり、より多くの市民が博物館を身近で、楽しく開放的な対話の場として利用するようになる」という状態が実現していることを目指してきた。

実施内容の大項目 4（外部便益測定）は着手できなかったが、複数タイプのプログラム実施とパッケージ化、ヨコ展開先の試行は遂行できた。

また、上の目標達成に向けて、ソリューション創出フェーズにおけるミュージアムのエデュケーター人材育成の準備と評価枠組みの設定ができた。

### ３－２．研究開発成果

**成果 1:本プロジェクトと実施ミュージアムのミッションとの整合性を確認するためのワークショップ実施スキル**

(1)　内容:本プロジェクトを展開するミュージアム関係者（ミュージアム職員、関係 NPO 法人スタッフ、設置者など）を一堂に会して、当該館のミッションにおいて、本プロジェクトがどのように位置づくのか確認するためのワークショップを実施した。その際、

事業のロジックモデル作成時の協働型評価ワークショップの形式を活用可能なことがわかった。

(2)　活用・展開：本プロジェクトで企画したプログラムを、ヨコ展開先で 1 回だけ実施することは簡単であるが、主体的なプログラム実施の継続、継続のためのプログラムの改善を期待するには、プログラムを実施するための根拠が必要となる。このスキルは、ヨコ展開先はプログラムを受け入れる際に同様に用いることができる。

**成果 2：コンテンツ「大阪湾の魚介類」を提供する 3 タイプのワークショップ手法の開発**

(1)　内容：大阪市立自然史博物館学芸員の石田・松井が専門とする大阪湾に生息する魚介類をワークショップの題材（コンテンツ）として、3 つの異なるタイプ（①常設展示でのトークショー方式、②特設の簡易展示スペース（屋台）に自由に来館者が参加する方式、③特設の簡易展示スペース（屋台）に定員を決めて一定時間で来館者が参加する方式）のワークショップが展開できた。

(2)　活用・展開：ヨコ展開する際に当該館の事情として、常設展示室スペースに余裕があるかどうか、またワークショップに学芸員とファシリテータの時間をどれだけ割くことができるのかで、3 つのタイプから選択することができる。さらに、繁忙期か閑散期かによって、タイプを変えることができる。

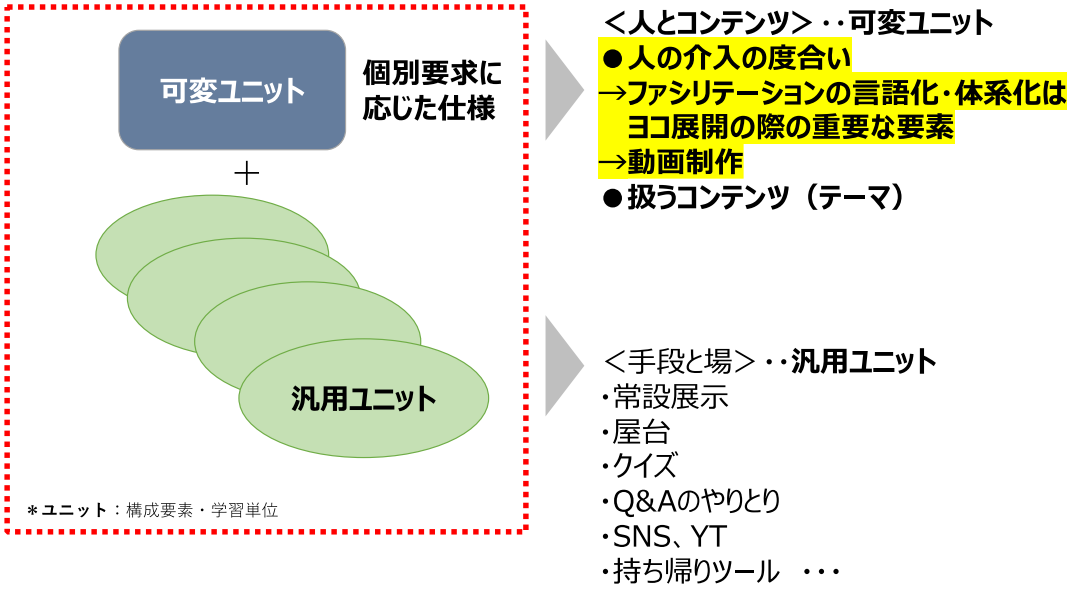
**成果 3：ヨコ展開先における多様な「可変ユニット」内容の発見**

(1)　内容：当初、作成したプログラムの「パッケージ」においては、1）SDGs に関するテーマと、2）ワークショップに係わる人材の介在の仕方を「可変ユニット」とした。一方で、R6 年 9 月のきしわだ自然資料館でのヨコ展開において、可変ユニットの内容が実は多様であることが判明した。具体的には 1）に関しては、これまで大阪市立自然史博物館で開催してきたワークショップと同様のテーマ「大阪湾の魚介類」を掲げて実施したが、その際に使う標本として、岸和田の漁港で水揚げされた魚を屋台に加えた。併せて、きしわだ自然資料館の有力コンテンツである「チリメンモンスター」を探すコーナーを会場に別途設けた。2）に関しては、大阪市立自然史博物館友の会会長の鍋島靖信氏に学芸員役を担い、ファシリテータは大阪自然史センターのスタッフが付いた。また「チリメンモンスター」にコーナーは、同資料館のボランティアが担当した。このようにミュージアムに勤務するスタッフ（学芸員、教育普及担当者）以外でも、ワークショップを担当することが可能であることがわかった。

(2)　活用・展開：ソリューションフェーズ創出フェーズにおけるエデュケーター人材育成の対象範囲を、ミュージアムに勤務するスタッフ（学芸員、教育普及担当者）に

限定せず、ボランティアや関連の活動を継続している市民グループのメンバーにも広げる。

図：来館時のワークショップにおける「パッケージ」イメージ




成果 4：ファシリテーション可視化のためのワークショップ運営と分析スキル

(1)　内容：ワークショップにおけるファシリテーションが、1）実施体制の検討、2）空間デザインの工夫、3）展示方法の工夫、4）参加者への働きかけの 4 要素から成り立っていることが判明した。またそれぞれにサブカテゴリーが存在していて、そのサブカルチャーごとに固有のアクションと参加者における期待する変化が対応していることがわかった。

(2)　活用・展開：上の内容に基づいて、「可変ユニット」の 1 つであるプログラムに係わるさまざまな人材（館内の学芸員・教育普及スタッフ・事務系スタッフ、ボランティア・市民グループ、および新規育成など）に向けた、ファシリテーションのあり方を説明し、ワークショップを企画するための要所を説明する動画を作成した。

成果 5：動画「ミュージアムでのワークショップの作り方」（本編・プロモーション版）の完成

(1)　内容：成果 4 を活用して、35 分の本編と 5 分のプロモーション版を完成させた。

(2)　活用・展開：プロモーション版は、大阪市立自然史博物館の HP で公開している。本編は、ソリューションフェーズ創出フェーズ申請時にヨコ展開先となるミュージアム（5 館程度）と共有して、具体的なプログラム内容を理解してもらうとともに、

本プロジェクトの趣旨を理解してもらい、エデュケーター人材育成の際に活用する。

(3)　その他：ファシリテーション動画は合計で８時間以上撮影しているので、本編をさらに詳細に説明する各論の編集も計画している。

**成果 6：SDGs 人材育成に向けた 2 つの流れの発見：①ワークショップ参加前後の促しとケア、②ミュージアム以外の教育の場の活用**

(1)　内容：ミュージアムでのワークショップ参加者とそれ以外の学習機会から、多様な SDGs 人材育成の流れを作る。具体的には、１）ミュージアムでのワークショップに誘うまでのアプローチとワークショップ参加後のケアを一貫して実施し、「SDGs 人材」を育成する、２）ミュージアム以外の社会教育や学校教育のルートからも「SDGs 人材」育成を実施する。

１）に関しては、【ミュージアム来館前】には、図書館や地下鉄コンコースなどにおいて、これまでのワークショップで生まれた手書きの Q&A を展示して、ミュージアムに関心のない地域住民や市民を対象に、SDGs への関心を高め、来館したい気持ちを促し、【ミュージアム来館時】には、ミュージアムでワークショップに参加し、主体的な学びと対話を経験し、【ミュージアム来館後】では、ワークショップ参加者に手渡すハンドアウトを使って、その後の関心がさらに深まり、広がるように促す。

２）に関しては、ミュージアム以外の社会教育（図書館、公民館）および学校教育の場を通じた SDGs 人材育成を目指して、(a) ミュージアムのワークショップで展開したコンテンツ、(b) ミュージアムが蓄積しているそのほかの情報を、図書館の司書・公民館の社会教育主事、学校の教諭などに提供し、SDGs に関するプログラム作成のサポートをする。

(2)　活用・展開：１）の【来館時】【来館後】に関しては、R6 年 12 月 14，15，21，22 に大阪市立自然史博物館で実施したワークショップで実践し、現在その効果を測定するための調査を実施中である。また【来館前】に関しては、実施の大項目 2-中項目 6 に記したように、R7 年 1 月に大阪市内の 2 つの公立図書館で試行する予定である。

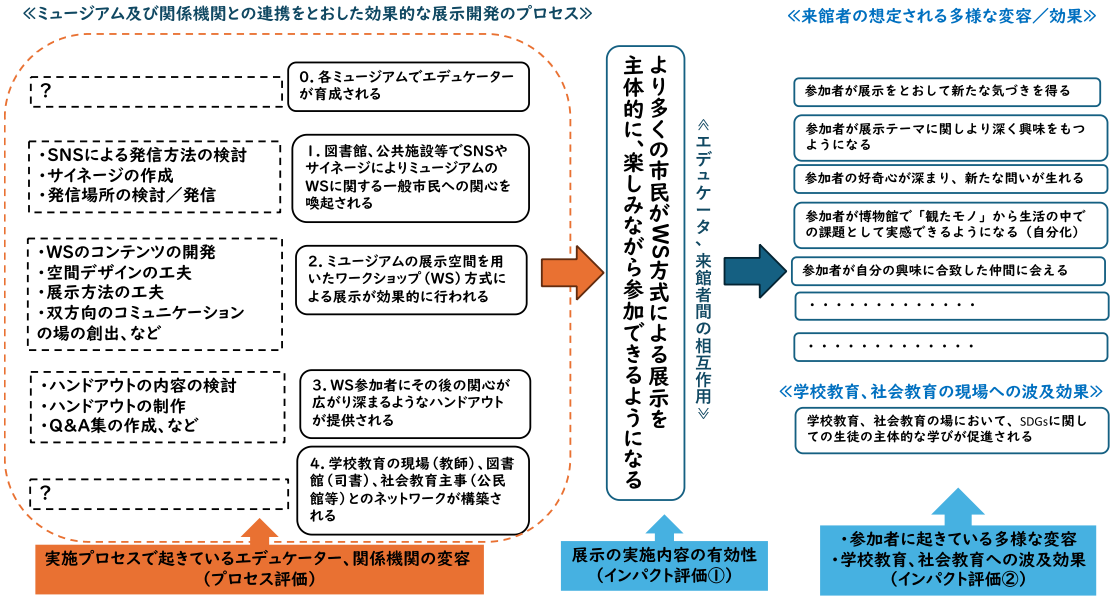
２）については、R6 年 9 月にきしわだ自然資料館でヨコ展開した際に、地元の社会教育関係者、学校関係者の要望から構想した。ほかのヨコ展開先においても同様の要望があると考えられるため、ソリューションフェーズ創出フェーズで実行する。

**成果 7：本プロジェクトに関する評価の視点・手法の開発**

(1)　内容:研究期間中に実施したワークショップでの参加者への調査結果などを検討し、評価の視点と手法、成果の測り方を設定した（下図・表参照)。

(2)　活用・展開：次年度に申請するソリューション創出フェーズにおいてこの視点・手法で評価を進める。

## 取組の概念図と評価の視点



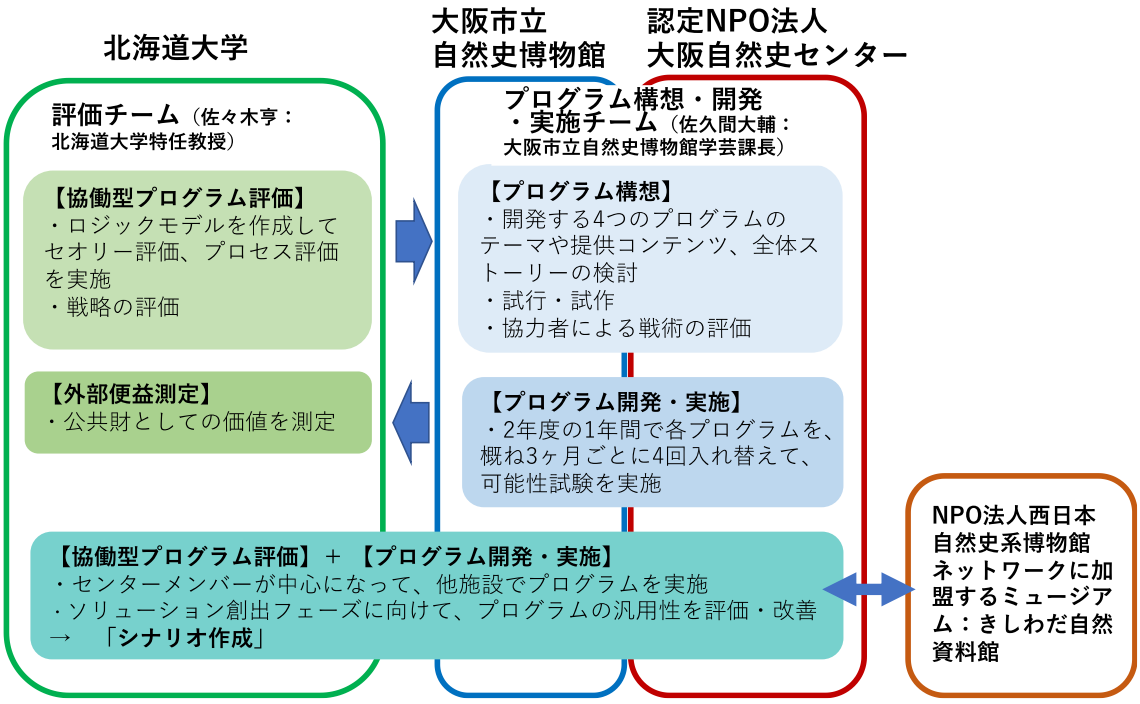

## 成果の測り方

| 評価視点 | 評価設問 | 必要なデータ（量的・質的） | データ収集方法 | 分析方法／比較基準 |
|---|---|---|---|---|
| プロセス評価 | エデュケーターは効果的に養成されたか？ | ①養成された人数／属性<br>②この取組の価値に対する認識の変容 | ①関連ドキュメント<br>②養成されたエデュケーターに対するアンケート（量）or<br>③インタビュー（質） | ①（目標値があれば）<br>②記述統計（一部推計統計）<br>③主題分析 |
| | 展示開発の実施プロセスに問題はないか？<br>その後の関心の広がりをうながすハンドアウトは適切に制作・配布されたか？ | ①実施上で発生している課題<br>②制作されたハンドアウト／配布状況 | ①関係者へのインタビュー<br>②関連ドキュメント | ①主題分析<br>②（目標値があれば） |
| | 関係機関とのネットワーク構築は順調か？ | ネットワーク構築の状況、その過程での課題 | 関係者へのインタビュー | |
| インパクト評価① | これまでミュージアムに足を運ばなかった人が来館するようになったか（このWSを実施したことで）？ | WSをきっかけとして足を運んだ人の割合（全体の参加者数に対し） | ・参加者に対するアンケート<br>・WSの参加者数 | |
| | WSの参加者が自分から興味を引かれて参加する様子がうかがえたか？楽しんで参加していたか？ | WSに自発的に参加している様子（双方向のやり取りの頻度、発言内容等） | WS参加中の観察 | |
| インパクト評価② | WSに参加することで、SDGsと展示テーマに関し参加者にどのような認識や行動の変容が起きたのか？ | ①参加者の興味・好奇心の深化<br>②多様な学びの有無とその内容 | ①、②とも<br>・参加者に対するアンケート調査<br>・ケース・スタディ（その後のエピソードを含む） | 主題分析 |
| | この取組によって、学校教育、社会教育の現場へどのような変容がもたらされたか、あるいはもたらされつつあるか？ | ・関係者のSDGs人材に向けての新たな気づきの有無とその内容 | 関係者へのインタビュー | 主題分析 |

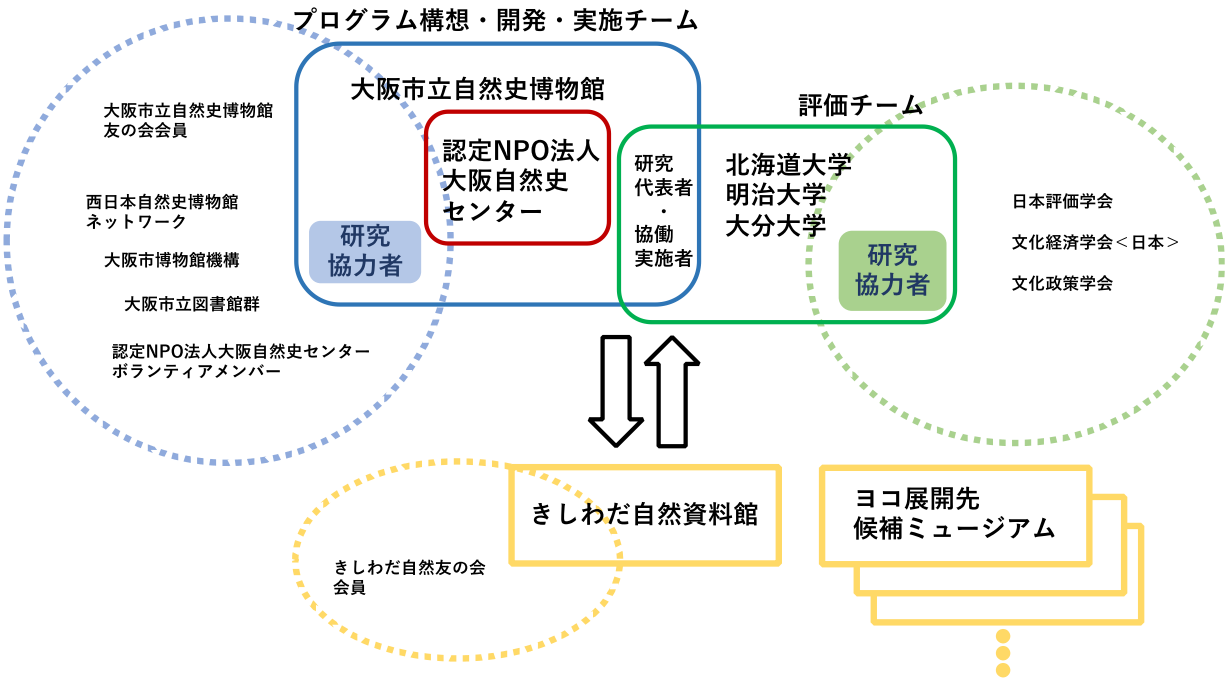
# ４．研究開発の実施体制

## ４－１．研究開発実施体制

・４－１－１　研究開発の組織体制




- 協働実施者（佐久間大輔）に期待された主な役割としては、プログラムの構想、企画・開発、実施であったが、認定 NPO 法人大阪自然史センターのサポートを受けながら、最後まで役割を遂行することができた。
- 事業終了時点でのステークホルダーマップは下記の通り



## ４－２．研究開発実施者

(1) プログラム構想・開発・実施チーム（リーダー氏名：佐久間大輔）

役割：プログラム構想・開発・実施

| 氏名 | フリガナ | 所属機関 | 所属部署 | 役職（身分） |
|---|---|---|---|---|
| 佐久間大輔 | サクマダイスケ | 大阪市立自然史博物館 | 学芸課 | 学芸課長 |
| 石田惣 | イシダソウ | 大阪市立自然史博物館 | 学芸課 | 学芸係長 |
| 松井彰子 | マツイショウコ | 大阪市立自然史博物館 | 学芸課 | 学芸員 |
| 中条武司 | ナカジョウタケシ | 大阪市立自然史博物館 | 学芸課 | 学芸課長代理 |
| 釋知恵子 | シャクチエコ | 大阪市立自然史博物館 | 学芸課 | 外来研究員 |

(2) 評価グループ（リーダー氏名：佐々木亨）

役割：協働型プログラム評価の設計と伴走支援

| 氏名 | フリガナ | 所属機関 | 所属部署 | 役職（身分） |
|---|---|---|---|---|
| 佐々木亨 | ササキトオル | 北海道大学 | 大学院文学研究院 | 特任教授 |
| 源由理子 | ミナモトユリコ | 明治大学 | 専門職大学院ガバナンス研究科 | 教授 |
| 卓彦伶 | タクゲンレイ | 北海道大学 | 大学院文学研究院 | 講師 |
| 林勇貴 | ハヤシユウキ | 大分大学 | 経済学部 | 准教授 |

## ４－３．研究開発の協力者

| 氏　名 | フリガナ | 所　属 | 役職（身分） | 協力内容 |
|---|---|---|---|---|
| 山中亜希子 | ヤマナカアキコ | 認定 NPO 法人大阪自然史センター | 理事 | プログラム構想・開発・実施 |
| 神山雄人 | カミヤマユウト | 認定 NPO 法人大阪自然史センター | スタッフ | プログラム構想・開発・実施 |
| 米澤里美 | ヨネザワサトミ | 認定 NPO 法人大阪自然史センター | スタッフ | プログラム構想・開発・実施 |
| 川上和歌子 | カワカミワカコ | 認定 NPO 法人大阪自然史センター | 理事・事務局長 | プログラム構想・開発・実施 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 西澤真樹子 | ニシザワマキコ | 認定 NPO 法人大阪自然史センター | 理事 | プログラム構想・開発・実施 |
| 大久保その子 | オオクボソノコ | 認定 NPO 法人大阪自然史センター | スタッフ | プログラム構想・開発・実施 |
| 北村美香 | キタムラミカ | 認定 NPO 法人大阪自然史センター | スタッフ | プログラム構想・開発・実施 |
| 笹木一義 | ササキカズヨシ | 国立アイヌ民族博物館 | 室長補佐 | 評価 |
| 本間浩一 | ホンマコウイチ | 慶應義塾大学 | 研究員 | 評価 |
| 古田ゆかり | フルタユカリ | サイエンスカクテルプロジェクト | 代表 | プログラム構想・開発・実施 |
| 島絵里子 | シマエリコ | 元国立科学博物館 | 教育部門 | プログラム構想・開発・実施 |

| 機関名 | 部　署 | 協力内容 |
|---|---|---|
| きしわだ自然資料館 | 学芸課 | プログラム実施（ヨコ展開） |

## ５．研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

### ５－１．研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

#### ５－１－１．プロジェクトで主催したイベント（シンポジウム・ワークショップなど）

| 年月日 | 名　称 | 場　所 | 概要・反響など | 参加人数 |
|---|---|---|---|---|
| | （なし） | | | |

プロジェクトで実施したプログラムおよび関係者対象のワークショップ

| 年月日 | 名称 | 場所 | 概要 |
|---|---|---|---|
| 2022.10.19 | キックオフミーティング。ワークショップ（1） | 大阪市立自然史博物館 | 1)同館職員に採択された本プログラムの内容を説明。2)同館の活動のロジックモデル構築WSを伴走しながら、本プログラムの位置づけを検討 |
| 2022.12.21 | ワークショップ（2） | Zoomミーティング | WS(1)で検討したロジックモデルを完成させるためにWSを伴走し、本プログラムの位置づけを明確化 |
| 2023.1.26 | ワークショップ（3） | 大阪市立自然史博物館 | 1）WS(1)(2)で検討したロジックモデルと本プログラムの位置づけを確認。2）ToCと評価指標をWS（3）で検討 |
| 2023.3.11-12 | 「トークショー方式」プログラムの試行実施と参加者への調査 | 大阪市立自然史博物館 | 1）両日とも、11:00、13:00、14:00から各30分間、試行プログラムの実施。併せて、2）評価調査とその日の振り返りを実施（3/12はサイトビジット） |
| 2023.7.8-9 | 「屋台方式」プログラムの実施と参加者への調査 | 大阪市立自然史博物館 | 両日とも、1時間おきにファシリテーターの人数を変えながら（0～3人）実施し、参加者への調査と参加の様子撮影（7/9はサイトビジット） |
| 2023.11.13 | ファシリテーションを可視化するためのワークショップ実施 | 大阪市立自然史博物館 | 研究協力者の源由理子さんをWSファシリテーターとして、「トークショー方式」「屋台方式」プログラム実施時における2名のファシリテーターの言動を可視化 |
| 2024.3.29-31 | ファシリテーションを可視化するための撮影。「屋台方式」プログラムの実施（3/30-31） | 大阪市立自然史博物館 | 絵コンテと香盤表に基づいた3日間の撮影（3/31はサイトビジット） |
| 2024.9.28-29 | 「屋台方式」プログラムの実施と参加者への調査 | きしわだ自然資料館 | 大阪市立自然史博物館で実施してきた「屋台方式」をヨコ展開（9/29はサイトビジット） |
| 2024.12.14-15<br>12.21-22 | 「屋台方式」プログラムの実施と参加者への調査 | 大阪市立自然史博物館 | 4日間とも、定員を決めて一定時間で来館者が参加する屋台方式で実施 |
| 2024.1（予定） | 図書館におけるプログラム広報とフックの提供 | 大阪市立中央図書館<br>大阪市立港図書館 | 「屋台方式」プログラム実施時に、参加者と学芸員との間で交わされた「Q&Aシート」を展示 |

## ５－２．社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

### ５－２－１．書籍、フリーペーパー、DVD など論文以外に発行したもの

(1)　佐々木秀彦，佐久間大輔 ライブラリーリソースガイド45号 特集「文化資源の保全と図書館・博物館－越境して未来を考えるアカデミック・リソース・ガイド 2023年11月15日（ISBN: 9784908515446）

(2)　動画「ミュージアムでのワークショップの作り方」本編（35 分）、プロモーション版（5 分）2024 年 9 月 30 日　プロモーション版 https://youtu.be/4X6GR2LzmBM

(3)　野口 淳，村野正景『博物館DXと次世代考古学』　（担当:佐久間大輔，範囲:「自然史系資料のデジタル公開と課題」 pp.93-100 雄山閣 2024年9月（ISBN: 9784639030003）

(4)　阿児孝之・山内敏明編『ミュージアムの未来をつくる 博物館情報・メディア論』担当：佐久間大輔，範囲：「2-2-3. 自然史標本の情報マネジメント」 pp.106-109. 美学出版　2025年2月出版予定

(5)　同書　担当：佐久間大輔・北村美香　範囲：6-2. ギャラリートーク・ワークショップなど 教育業務のメディア論.　pp.260-266. 美学出版　2025年2月出版予定

(6)　大阪市立自然史博物館（山中亜希子・川上和歌子編）『「いらっしゃい／大阪の海のさかなやさん」～自然史博物館で考える海と生活』大阪市立自然史博物館 2025年3月　https://omnh.repo.nii.ac.jp/records/2000217

### ５－２－２．ウェブメディアの開設・運営

（なし）

### ５－２－３．学会以外のシンポジウムなどでの招へい講演　など

(1)　横須賀市立自然・人文博物館職員向け研修　佐久間大輔「これからの博物館　市民の対話と館内の連携」2024年3月21日、横須賀市立自然・人文博物館

(2)　北海道大学プラス･ミュージアム・プログラム　シンポジウム　佐久間大輔・源由理子・林勇貴「ミュージアム評価の呪縛からの脱出」2022年12月11日、北海道大学

(3)　北海道大学プラス･ミュージアム・プログラム　クロージングフェスタ　源由理子「評価における対話と共創のマネジメント」2023年2月11日、北海道大学

(4)　一般財団法人 地域創造　公立美術館地域展開型研修事業講演　佐々木亨「ミュージアムにおけることば・物語・身体−臨床の知をどのように評価するか−」2023年3月14日、長崎県立美術館

(5)　文化庁 R5年度ミュージアムトップマネジメント研修　佐々木亨「ミュージアム経営改善のため評価のあり方」2023年9月27日、文化庁

(6)　アーツカウンシル東京　アーツアカデミー研修　源由理子「活動の意義を引き出す評価軸を磨く～ロジックモデルを活用した評価の考え方、その方法論を学ぶ～」2023年10月12日、オンライン

(7)　日本博物館協会第71回博物館大会　佐久間大輔「博物館の役割を地域の中で確かめ強化する：孤軍奮闘から連携への戦略的なシフトを睨んで」2023年11月15日、千葉市文化センター

(8)　シンポジウム 新生態博物館III　佐久間大輔「市民参画、DX、ネットワーク協力による 自然史博物館の現代的課題対応」2023年11月10日、台湾国立科学教育館

(9)　明治大学・Foreign Trade University（ＦＴＵ） 国際カンファレンス “Public Governance and Social Innovation in the Re-globalization Context” MINAMOTO Yuriko ″Social Impact and Innovation: Challenges of Business and Social Sectors″ 2023年11月1日、Foreign Trade University（ベトナム・ハノイ）

(10)　文化庁　文化をつなぐミュージアム研修　源由理子「博物館の魅力を引き出す評価～協働型評価のすすめ～」2023年12月10日、オンライン

(11)　令和５年・沖縄県博物館協会秋の研修会　佐久間大輔「「博物館の可能性」を地域・世界の中で、みんなで持続的に模索する」2023年12月21日、沖縄県立博物館・美術館

(12)　可児市文化創造センター主催　あーとま塾セミナー　源由理子「文化芸術の社会的価値を伝える評価の役割～協働型評価の取組から～」2024年2月8日、可児市文化創造センター

(13)　佐久間 大輔「大阪市立自然史博物館は何を目指すのか 大阪市立自然史博物館のミ

ッションと支え方」大阪市立自然史博物館・大阪自然史センター活動報告会「持続可能な博物館のためのお金の話：クラファンだけじゃない長期サポーターの集め方」 2024年4月29日 大阪市立自然史博物館・大阪自然史センター

(14) アーツカウンシル東京　キャパシティビルディング講座　源由理子「活動の意義を伝える評価軸を磨く～評価の考え方、その方法論の基礎を学ぶ～」2024年8月30日、オンライン/ 2024年9月25日、対面

(15) JINSHA情報共有会　源由理子「評価と社会的インパクト～評価学の視点から」2024年10月9日、北海道大学

(16) 福島幸宏，大向一輝，呉屋美奈子，佐久間大輔「図書館・博物館のOpen化を推し進めるために 」第26回図書館総合展2024 2024年11月7日 図書館総合展運営委員会

(17) 東京藝術大学芸術未来研究場トークセッション シンポジウム　源由理子「アートの社会的インパクトー新しい評価･発信方法に向けてー」2024年11月28日、東京藝術大学

(18) 文化庁 R6年度ミュージアム・パブリックリレーションズ研修　佐々木亨「ミュージアムは何のために存在するのか–使命とメッセージ–」2024年12月4日、国立アイヌ民族博物館

(19) 文化庁 R6年度ミュージアム・パブリックリレーションズ研修　佐々木亨「ミュージアムのロジックモデル作成　グループワーク」2024年12月5日、国立アイヌ民族博物館

(20) シンポジウム「博物館でおこなわれるワークショップの実践知の共有をめざして」佐久間大輔　ディスカッションコーディネーター　2024年12月6,7日　大阪市立自然史博物館

## ５－３．論文発表

### ５－３－１．査読付き（2 件）

(1) 佐久間大輔「自然史資料は研究資源であり文化資源でもある-地域の文化資源を担う自然史博物館-」Journal of Geography (Chigaku Zasshi),Special IssueAccepted Date: 2024.7.29

(2) Sakuma D (2024) Cultural Heritage Disaster Risk Management Network Promotion Council & Natural History Museums: Pre- & Post-Disaster Response in Japan. Biodiversity Information Science and Standards 8: e139629. https://doi.org/10.3897/biss.8.139629

### ５－３－２．査読なし（9 件）

(1) 佐久間 大輔「地域の自然史情報と保全政策，人材を育む場として」『地域自然史と保全』45(1)，2023年

(2) 西澤 真樹子「NPO法人が支える博物館コミュニテイ 大阪自然史センター22年の

歴史と舞台裏」『BIOCITY』97, 2024年

(3)　川端清司, 佐久間大輔 「巻頭言：新時代に向けた大阪市立自然史博物館の使命」 大阪市立自然史博物館館報（49）1-2 2024年6月

(4)　佐久間 大輔「生物多様性情報標準化会議(TDWG)および国際自然史標本保存学会(SPNHC )の動向と日本の自然史コレクション情報 」全科協ニュース 54(4) 8-8 2024年７月

(5)　佐久間 大輔「博物館が存在する価値を量る 」『ミュージアムの新たな評価手法構築に関する実践研究 調査報告書』 39-47 2024年9月

(6)　源由理子・佐々木亨「滋賀県立琵琶湖博物館の展示評価-リニューアル前後の比較から-」『ミュージアムの新たな評価手法構築に関する実践研究 調査報告書』99-112,　2024 年９月

(7)　林勇貴「仮想評価法による公共文化施設の評価 -大阪市立自然史博物館と伊丹市昆虫館の事例から-」『ミュージアムの新たな評価手法構築に関する実践研究 調査報告書』5-30,　2024 年９月

(8)　佐久間 大輔「生物多様性地域戦略と『自然共生サイト』―面積だけでない30by30を目指して―」地域自然史と保全, 46(2):印刷中. 2024年12月

(9)　道盛正樹・川上和歌子・西澤真樹子「博物館と市民をつなぐNPO-大阪自然史センターの活動」『日本の科学者』(12月号) 59, 2024年

## ５－４．口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

### ５－４－１．招待講演（国内会議２件、国際会議１件）

(1)　佐久間大輔（大阪市立自然史博物館)、「日本の博物館における SDGs の達成状況と課題」、全日本博物館学会（オンライン研究会)、2022 年 12 月 5 日

(2)　佐久間大輔（大阪市立自然史博物館)「地域の文化資源を担う機関としての自然史博物館 －菌類資料を中心に－」日本学術会議地球惑星科学委員会地球･人間圏分科会、統合生物学委員会・基礎生物学委員会・地球惑星科学委員会合同自然史・古生物学分科会　公開シンポジウム「文化施設としての自然史系博物館を考える」　2023 年 9 月 23 日、オンライン

(3)　石田惣（大阪市立自然史博物館）”Citizen Science Projects in the Osaka Museum of Natural History”台北市野鳥学会　2023 年、オンライン

### ５－４－２．口頭発表（国内会議１件、国際会議０件）

(1)　佐久間大輔・松井彰子（大阪市立自然史博物館)・山中亜希子・神山雄人（認定NPO法人大阪自然史センター)「博物館を「SDGsを語る場」とするために必要な仕掛けと人材～大阪市立自然史博物館RISTEX事業の取り組みから～」全国科学博物館協議会 第32回研究発表大会 2015年2月13-14日（予定)、兵庫県立人と自然の博物館

５－４－３．ポスター発表（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

（なし）

５－５．新聞報道・投稿、受賞など

５－５－１．新聞報道・投稿

（なし）

５－５－２．受賞

（なし）

５―５―３．その他

（なし）

５－６．特許出願

５―６―１．国内出願（0 件）

５―６―２．海外出願（0 件）

## ６．その他（任意）